

富士から見た梅雨前線

大井正一 山本三郎

第1図及び第2図は富士山頂から5分間を隔て、東の方を写したものである。第1図の右の方を見ると広範囲に亘って水平な雲の薄層があり、下から上昇気流が起って塔状積雲となり、この薄層の上に出ると急にふくれ上っている誠におもしろい有様が見られる。第2図を見る

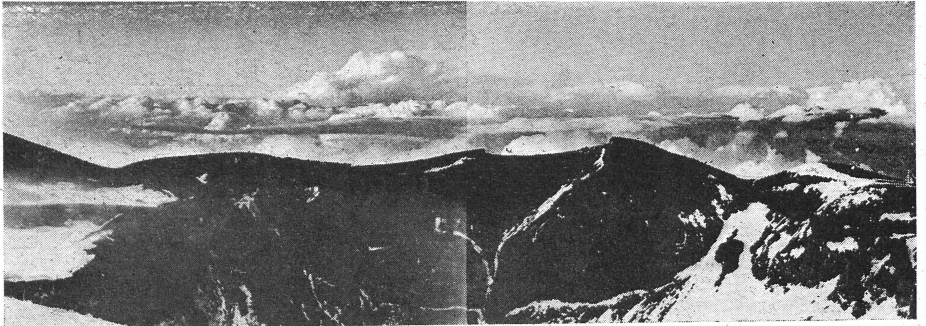
と盛んに活動している部分は第1図で活動している部分の手前にある部分の雲であって、僅か数分でこのように盛衰が起っているのがよく見られておもしろいと思う。第3図は日夜の写真である。これと前の図と比べて見ると左方の雲の峰は八王子の方向で、左の雲の峰は平塚の



第1図

29年7月6日 12h33m 撮影したもの、火口壁は空から白山岳、大日岳、伊豆ヶ岳、成尾岳で白山岳には電柱と吉田口の小屋、成就岳には電柱と無線中継所が見える、左手の白い雪は向うが金明水、手前が小内院附近である。(山本三郎撮影)

第2図
17h 40m に撮影したもの、僅か5分のうちに前に活動していた雲の峰が弱まり、前には小さく見えるものが大きく盛り上って活動しているさまがよく見えている。(山本三郎撮影)



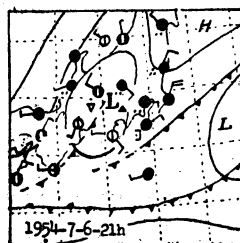
第3図

第2図と同じ位置から写した夜景で、火口壁は左から大日岳、伊豆ヶ岳、成就岳である。大日岳の肩に明るく見えるのが横田基地、東京の灯は大日岳の後ろに非常に薄く見えるのがその上の空が明るくなっているのでよくわかる。伊豆ヶ岳と成就岳の間には大山が黒く見え、その肩に厚木基地が明るくその上に横浜が見える。成就岳の右には無線中継所が見える。その上に三の塔が黒く、その上に平塚の灯が明るく見え海岸線に沿っている。これと前回と比較すると雲の位置が推定される。(大井正一撮影)

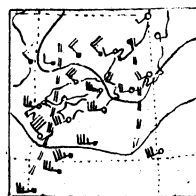
方向にあることがわかる。次に当日の気象状態を調べて参考としたい。

地上天気図(第4図)を見ると梅雨前線から切り離された弱い低気圧がある。この年の梅雨は7月中ほとんどいつも続いているので、一応典型的な梅雨状況と見てさしつかえない。上層天気図(第5図)を見ると弱い上層の谷があり、これが低気圧と結びついている。館野の高

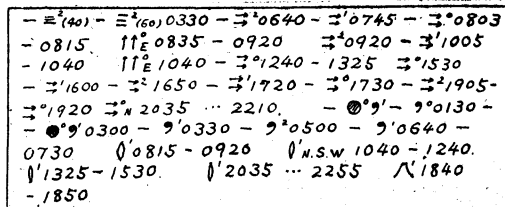
層資料(第6図)を見ると 550~600mb 付近で気温は等温となり、湿度は80%から27%に飛躍している。この層の下では湿度が飽和に近いので雲ができつつあり、この層の上では気温減率や湿度から見て恐らく下降気流になっているであろう。このような低温度が異常視程と関連していることはよく知られている[1]。又、風を見るとこの層で急に弱くなっているが、これも梅雨時によ



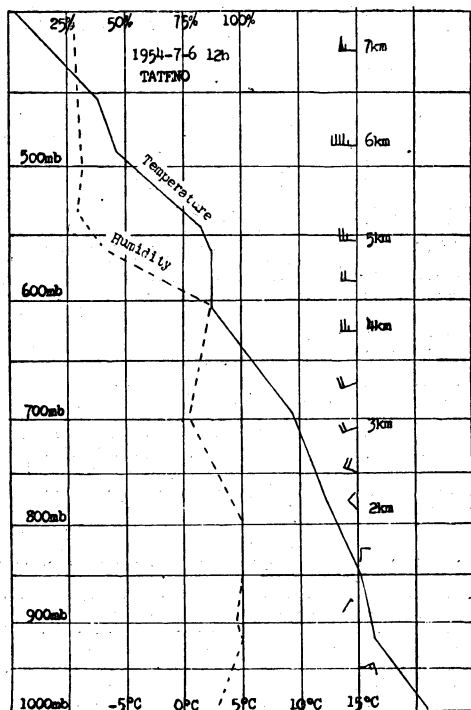
第4図 地上天気図



第5図

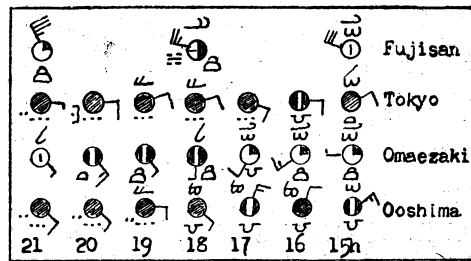


第7図 当日の富士山の記事



第6図

く見られることである。当時の気象変化を調べてみるにまず富士山では(第7図)7時半頃までは雨があるが、それ以後は流れ雲が時々見られる程度で、ほとんど常に



第8図 当日の天気雲地図

異常視程を示している。すなわち梅雨を起す雲の高さが富士山頂まで達する事が少く、視程は良いといえる。6月の山岳気候表〔2〕をみると日照率は富士山が55%で全国第2位を示し、箱根山は21%できわめて少いことはよくこの事実を物語っている。もっと平たくいえば富士山は梅雨時でも雲の上に出ていて視程が良く、すばらしい雲海が見られることが多いといえるであろう。

次に各地の天気をしらべて見るに大島は19時から、東京は20時から雨になっているが17時には乱層雲となっているのみで雨になっていない。しかしこの雲は小さいから局地的に雨を降らせているかどうかは、この図からはわからないことになった。21時に富士山がNNW35ノットとなったことは上層の谷の通過を示すものであろう。

(1955. 5. 25) (中央気象台)

〔1〕ナンガバルバット 朋文堂

〔2〕山岳講座 白水社

Stardust と雨

オーストラリアの E. G. Bowenが1953年に発表した流星群が seeding の役をして毎年一定の日に雨が多いとする説は、われわれの意表に出た新説であった。新説はとかくとっぴに見えるので広く興味と関心を持たれた。本月4月 Oliver と V. J. Oliver アフリカの赤道地域のデー

ターを用いて新説が適用されるかどうかを調査発表している。場所としては東アフリカをえらび、南ローデシヤも調べた。統計的な取り扱いをしたのであるが、結論としては、Bowen説を支持できるとはならなかった。けれども何分にも流星説が大気の超高層にとどいてから地上付近までどのようにして到達するかも全

然わからないし、粒子の大きさも十分な確定をされているわけでない。だからわれわれの手に入るデータだけで結論を出すわけにはいかない。わが国でも磯野・駒林両氏によって火山と降雨の関係が論じられているところでもあるし、流星群と雨の関連は精密な研究ができるまで積極的な否定はできないであろう。(伊東)